

図画工作の授業における日本語指導法の提案

—教科としての図画工作の特徴に注目して—

齊藤美穂 (神戸大学)

1. はじめに

発表者は、日本語学習が必要な JSL 児童生徒に対する教育への応用を目的に、アメリカ合衆国にある、ニューカマーの英語学習者を対象とした中等教育学校でフィールドワーク (以下、「FW」) を行った¹⁾。同校で複数の教科の授業を観察する中で、Art すなわち図画工作／美術 (以下「図工」) の授業で行われている活動に、言語及び他の教科学習につながる学びの場としての大きな可能性が感じられた。言語学習と教科学習の統合への取り組みは日本でも進められており、文部科学省の主導のもと JSL カリキュラムの開発も行われてきたが、いわゆる主要科目 (国語・算数／数学・理科・社会及び英語) が中心である²⁾。本発表では、FW で得た知見をもとに、図工の授業の持つ学びの場としての可能性を示し、日本語指導の導入方法を提案したい。

2. 調査概要

FW は、2015年5月～7月にかけてアメリカ合衆国ワシントン州シアトルにある、Seattle World School (以下、SWS) で行った³⁾。当時シアトルの公立学校には、4つのニューカマーの英語学習者を対象としたバイリンガルセンター校があり、SWS はそのうち唯一の中等教育学校 (日本の中学校・高校相当) であった。調査は基本的に参与観察とし、生徒のプライバシー保護の観点から、授業中の写真や動画の撮影は行わず、フィールドノートをつけて記録した。一部、担当教師の許可を得て授業時間外に教室の掲示物の写真撮影や、インタビューの録音をさせてもらった。

3. 言語学習と教科学習の両立

SWS の教科指導法で中心的な位置を占めるのは、Sheltered Instruction (以下、「SI」) である。Echevarría J. et al. (2012) によれば、SI は第二言語としての英語学習者 (以下「ELSL」) が学齢相当の教科の知識を身につけることを目標として、彼らに理解可能な形で指導しつつ、教科学習のための言語 (academic English) 能力の発達も目指す指導法である。内容ベース (content-based) で言語能力の発達を促す教授法とともに、アメリカにおける ESL の指導ではよく知られたものであり、両者はしばしば連携しているという。この考え方は、「日本語指導と教科指導を統合し、学習活動に参加するための力の育成」(文部科学省 2007) を目指す JSL カリキュラムの考え方も合致するものである。

4. フィールドワークで得られた知見

SWS の Art クラスにおける主な言語指導実践は、①母語訳つきの基本語彙リストの作成と、②課題ごとのプロジェクトシート作成である。新入生にはまず①、つまり色や形、立体などの図と英語による呼称及び母語訳を記したリスト (冊子体) を作成させる。②には言語及び内容面の目標、重要語とその母語訳、手順と記録を記す欄があり、課題ごとに必要な語彙の運用を促される。

他に図工のクラスの特性として、③自然で本質的な言語使用の場になりうるという点がある。SWSでは多くの道具や材料が共有され、大きな机で複数の生徒が作業をするために貸し借りや交渉が必要となる。さらに、図工の内容には④他の教科内容への橋渡しとなるものが含まれる。課題の中には、課題自体に言語運用が含まれるもの（決まった文型を使った詩作を伴う絵本作成）もあったが、そのようなものでなくても潜在的に図工で使う語彙には、算数／数学で用いられる図形や立体に関する語彙が含まれている。また、写真をもとに拡大した肖像画を作成する課題には、数学で学ぶ比の応用が含まれるなど、体験を通じた抽象的な概念の理解の助けともなりうる。

5. 日本における図工の授業への応用案

上記から、図工でも SI や JSL カリキュラム開発の理念に即した指導が可能と考えられる。4節で述べた知見について、図工の教科書⁴⁾の構成を参照しながら応用を検討してみたい。①の作成は、教科書記載の頻出単語にもとづいて行えると思われる。生徒が理解可能な語彙リストの存在は、生徒と教師双方に利点がある。②の作成には、教科書記載の目標や手順が活用可能である。図工で使用される語彙は、上記のように教科学習につながる語彙のほか、日常生活で頻用されるものも多く、語彙力の増強に有益である。①②は背景知識（母語）の活用や具体物・体験による学習という意味でも言語習得を促す効果は大きいと考えられる。（ただし、動詞などの活用語はさまざまな形で出現する点に注意が必要である。）また、リスト作成で終わらずに、意識的にそれらの語彙を使ったコミュニケーションをはかることも重要である。図工の教科書には、子供らしい発話例が多く見られるため、モデルとして利用可能である。③については、このことを念頭に置き、日本語教師と協働して、予想されるやりとりを用いられる文型を予め指導しておくなど、発話を促す仕組みづくりが必要である。④は、他教科のカリキュラムと対照して連携可能な項目や活動を洗い出す必要があるため即時の応用は難しい。他の提案についても、学年ごとに定められたカリキュラムがある等、学校教育現場の事情から実現は難しいかもしれないが、図工における意識的な言語指導の導入の実現に向け、教材分析や実際の教育現場の調査などを進めていきたい。

- 注)
- 1) 神戸大学若手教員長期海外派遣制度による派遣で半年間ワシントン大学で研修を行った。
 - 2) 帰国・外国人児童生徒教育のための情報検索サイト「かすたねっと」の「教材検索」にも図工のカテゴリーはなかった。（<https://casta-net.mext.go.jp/kyouzai/> 2022年2月22日時点）
 - 3) 当時の同校校長に FW の趣旨を説明し許可を得たうえで、教頭に書面にて許諾を得た。また、Art クラスの内容は、担当教員である Lori Leberer 氏に、英語による研究ノート（Saito2018）の草稿を送付し、公開に問題がないことを事前にメールで確認済みである。
 - 4) 開隆堂及び日本文教出版刊行の図画工作の教科書（いずれも平成 29 年刊行）を参照した。

【引用文献】

Echevarría J., Vogt, M. E., & Short, D. (2012). *Making content comprehensible for English language learners: The SIOP model. Fourth edition.* Boston: Pearson.

Saito, Miho (2018) The potential of art classes for developing the language proficiency of students studying Japanese as their second language. 『神戸大学留学生教育研究』 2, pp.31-51.

文部科学省 (2007) 「JSL カリキュラムの基本的考え方」(pdf 版: 右記よりダウンロード https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/011.htm)